



「イエス！次郎（校長室より）」（第5号） 「誰かがちゃんと見ている」

大学4年生の冬のアルバイトに、私は小学校の体育館の床張りを選んだ。当時の日当で8千円はなかなか良かった。集まったアルバイト生は各学年から1人ずつの4人で、作業を指示する正社員の方が2人いた。初日の午前中は、屋外にある鉄筋等を体育館内に運び込む作業で、かなりきつかった。午後からは、床下に垂直に打ち込まれた鉄筋に、U字型の金属をある高さまでねじ込む作業を命じられた。床下から生えている鉄筋の数は、縦横およそ50本の2500本。気が遠くなりそうだったが、私は1年生をつかまえて、「勝負！」と叫んだ。「1往復のスピードと正確さで、勝ったら生ビール1杯！」と言うと、「僕、未成年です。」と1年生。「大丈夫。俺は負けん。」と私。「位置について、用意、スタート！」と叫んで勝負開始。中腰の姿勢での作業はとてもきつかったが、負けたくなかった。最初はなかなか手間取ったが、だんだんコツを覚えてきた。1年生との差も少しずつ大きくなり、折り返す頃には勝利を確信したが、その後全く手を抜かずに私が圧勝した。1分以上遅れてゴールした1年生に、「はい、1杯目、お疲れさん。」と声をかけると、「くそ〜！もう1回お願いします！」と言うではないか。なかなか見所のある1年生である。その後、1年生もコツを掴み、いい勝負にはなったが、私が負けることはなかったし、何よりとても楽しかった。

15時からの休憩時間に、私は1年生と楽しく話していたが、「先輩、あの人達全然ダメですね。僕らの半分も仕事していませんよ。」と1年生がぼやいた。私も気になってはいたが、「気にすんな。俺ら楽しいやろが。それより、まだ勝負するか？」と聞くと、「はい。次こそは勝ちます。」と1年生。この1年生のおかげで本当に楽しく仕事をする事ができた。

17時になり、アルバイト生が集められ、正社員の方からお話があった。「アルバイト生の皆さん、お疲れ様でした。今日はこれで終わりです。初日で慣れずに大変だったと思いますが、4人ともよく頑張りました。特に2人には、今から特別ボーナスを支給します。」とおっしゃった。私と1年生は心の中でガッツポーズした。が、「その2人。」と正社員の方が指さしたのは、私たちではなかった。「え〜！何で〜！」という気持ちが、私の顔にはっきり出ていた。1年生も同じだった。呼ばれた2人も変な感じで前に出た。その2人へ正社員さんからの言葉。「2人へ特別ボーナス5千円を支給します。日当は後日事務所に取りに来てください。明日からもう来なくていいです。」一瞬顔色が変わった2人へ正社員さんからの言葉。「お前達、おじちゃん達が何も見てないと思ってるのか。大人をなめるなよ。一生懸命やってあの程度の仕事しかできんのか。違うな。明らかに前達は手を抜いていた。それに比べてこいつらはどうだ。馬鹿みたいに楽しそうに競

争しながら仕事して。こいつら見て、お前達何とも思わなかったのか。俺たちはこいつらに魅力を感じたし、見ていてこっちまで楽しくなったぞ。アルバイト生はこいつら2人で十分だ。以上。」

「馬鹿みたいに」はちょっと失礼だと思ったが、嬉しかった。私たちの仕事をちゃんと見ていてくれて、ちゃんと評価してくれたことには感謝しかなかった。次の日から、1年生と2人でいろんな話をしながら楽しく仕事した。4人の仕事量を2人でやったので、かなり大変だったが、充実していた。正社員の方ともいろいろな話ができ、最終日には、次のアルバイトの話もいただいたが、都合が合わずに丁重にお断りした。

教員になってから、自分のクラスや学年の生徒には、このときの話をしてきた。伝えたかったことは、「さぼろうと思えばいくらでもさぼれる毎日の掃除を、仲間と一緒にいろんな話をしながら楽しくやることができる人に、俺は人間的魅力を感じる。」とか、「誰も見ていないと思っていても、誰かがちゃんと見ている。」とか、「手を抜いているか、いないかは、誰よりも自分が一番わかっている。」とか。皆さんは、何を感じただろう。

最後に、この話をしながら思ったことが1つある。私はなぜ、1年生だけに勝負を挑んだのだろう。もし、4人で勝負していたらどうなっていただろう。少し考えてみたい。

